第Ⅲ章　調査概要

1　西隆寺周辺の調査

西隆寺の寺地は、右京一条二坊のうち九・十・十五・十六の４坪を占める。この右京一条二坊をはじめ周辺の右京二条二坊、同北辺一条二坊、同二条三坊、同一条三坊、同北辺一条三坊では、奈良国立文化財研究所や奈良市教育委員会などがこれまでに数多くの発掘調査を実施している。それらのうちの主なものの成果の概要について条坊関連遺構など奈良時代の遺構を中心に、以下にまとめておく。なお、右京一条三坊の西大寺関連調査の概要については、『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』（1990・西大寺）の「第Ⅲ部・発掘調査／第Ⅰ章・調査の経過と概要（p47～49）」「付録２・西大寺境内におけるこれまでの調査と概要（p191～193）」にまとめられているので、ここではくりかえさない。

第82－4次（調査位置　右京一条二坊一坪／西一坊大路・調査面積　35㎡）

西一坊大路西側溝を検出。幅1.8m、深さ40㎝。（『昭和48年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

第95－9次（右京一条三坊十坪／同十一坪／一条々間路・33㎡）

西大寺造営以前の一条々間路の南北両側溝を検出。道路幅は側溝心々で5.6m。西大寺中大門が予想されたが、その遺構は検出できなかった。（『昭和50年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

第95－10次（平城宮〈右京一条一坊十六坪相当〉／西一坊大路・40㎡）

西一坊大路東側溝を検出。溝東肩が未検出のため規模は確定できないが、幅1.4m 以上、深さ40cm 以上。近接する第82－４次調査で検出した西側溝心の位置を考え合わせると、西一坊大路の幅員（側溝心々間距離）は24m 以上あり80尺あるいは70大尺と考えられる。（『昭和50年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

西一坊大路幅員

第103－7次（右京一条二坊二坪・800㎡）

右京一条二坊二坪の北辺東部と北辺西部の２ケ所に調査区を設定。奈良時代の遺構としては、東部調査区で掘立柱東西棟建物２棟、掘立柱南北塀３条、東西溝３条などを検出。遺構の重複関係から数時期の遺構変遷が考えられる。また、西部調査区では掘立柱南北塀１条、東西溝４条などを検出。これらの東西溝のうちのいずれかが一条々間北小路の北側溝あるいは南側溝にあたる可能性が高いが、どれをあてるかは検討を要する。なお、発掘調査概報では SD100と SD105をそれぞれ北側溝、南側溝にあてているが、佐伯門推定心の位置などから考えて南に寄り過ぎ、妥当ではない。（『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）

第103－14次（右京一条二坊四坪／西一坊大路・500㎡）

佐伯門の北方約40～100m で４ケ所の調査区を設定。西一坊大路路面と東西両側溝を検出。

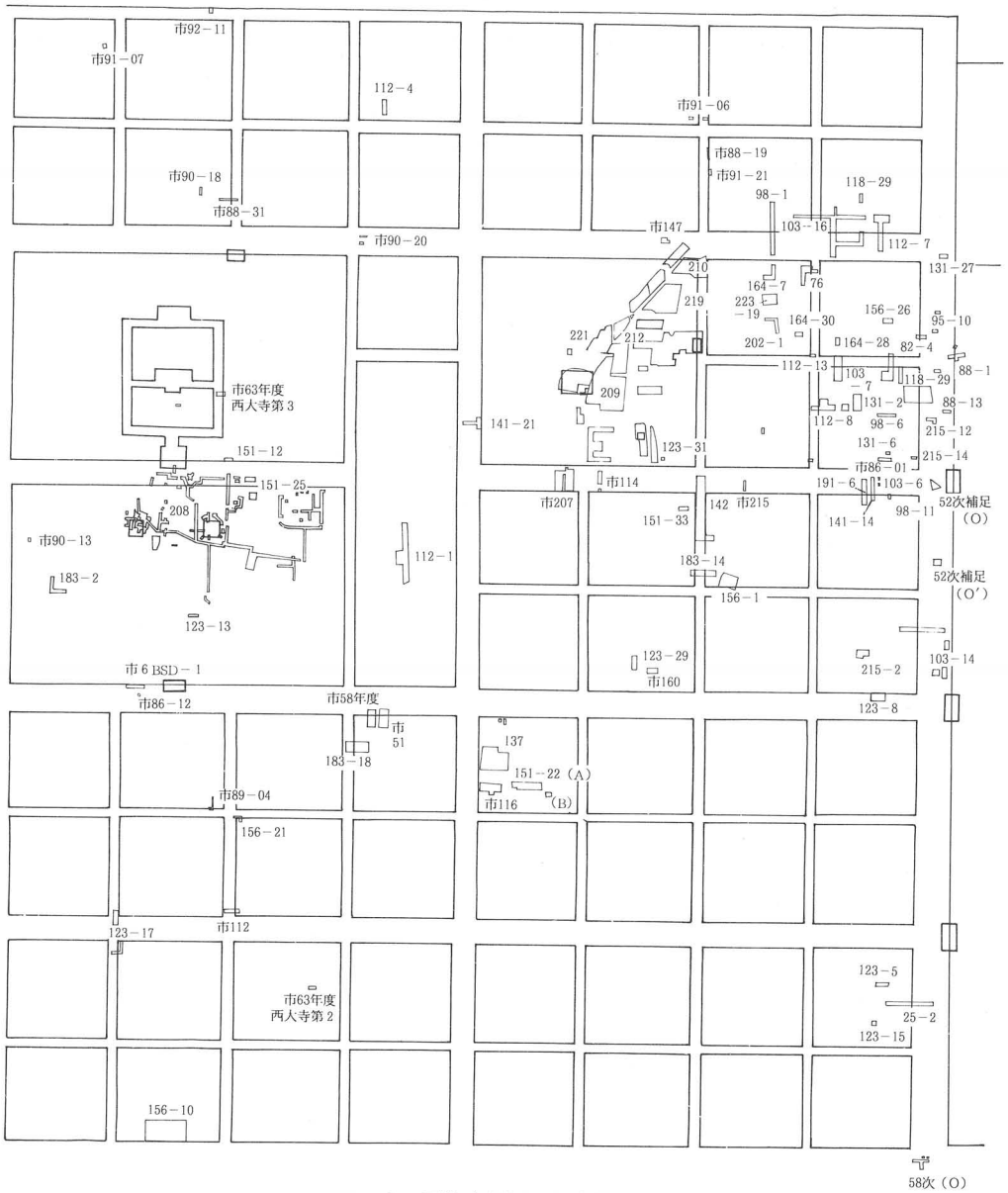

Fig. 2　西隆寺周辺の調査位置図

東側溝は幅3.8～5.6m 深さ0.5～0.8m、西側溝は幅1.5～2.0m 深さ0.2m。道路幅は側溝心々で23.65m、80尺と取れるが、側溝幅が広いため70大尺とも考えられる。右京一条二坊四坪内では、東西に廂をもつ南北棟礎石建物を検出。(『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第103－16次（右京北辺二坊二坪／同三坪／北京極大路・1,300㎡）

右京北辺二坊二坪南西部と三坪南東部での調査。二坪では、大きく3時期に区分できる奈良時代の遺構を検出。このうち、奈良時代初頭にあたる第1期は二坪と三坪が一体として利用されていた時期であり、桁行7間南廂付の東西棟掘立柱建物を中心に、南北棟掘立柱建物、掘立柱塀などで構成され、整然とした配置を示す。第2期には二坪と三坪を区画する小路（西二坊々間東小路）がつくられ、二坪三坪それぞれに掘立柱建物等が建ち、井戸が掘られている。この調査によって、北辺坊も平城京造営当初から継続的に宅地として用いられていたことが明らかになった。なお、発掘調査概報ではSD04を北京極大路北側溝にあてているが、北に寄り過ぎ

北辺坊も継続的に宅地

ており、妥当ではない。(『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第112－1次（右京一条三坊三坪・490㎡）

この場所は西大寺の寺地にあたり、『西大寺伽藍絵図』（元禄11年・1698）では西大寺の付属建物が描かれている。検出遺構のうち奈良時代のものは掘立柱建物3棟、掘立柱塀、溝など。これらが西大寺関連のものなのか、それ以前のものなのかは不明である。(『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第112－7次（右京北辺二坊二坪／北京極大路・360㎡）

二坪内で、6間2間の南北棟など3棟の掘立柱建物と掘立柱塀を検出。また、北京極大路北側溝と見られる東西溝を検出。この溝は2時期あり、前期は幅1.8m深さ0.5mの規模、後期は前期の溝を約1.2m北に移し、幅2.2m深さ0.5mの規模である。(『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第112－8次（右京一条二坊二坪／西二坊々間西小路・350㎡）

検出遺構は、古墳時代と奈良時代に大別できる。奈良時代の遺構としては、掘立柱南北棟建物3棟、溝3条を検出。建物のうち2棟は、柱筋を揃えて東西に並ぶ。また、溝のうちの南北方向の2条は、西二坊々間東小路の東西両側溝と考えられ、道路幅は側溝心々で8.3m。(『昭和53年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第118－29次（右京一条二坊二坪／西一坊大路・570㎡）

西一坊大路西側溝（幅2.3～3.0m深さ0.6m）を検出。西側溝の西側に平行する南北溝があるが、この2本の溝の間が築地塀と考えられる。(『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第123－17次（右京二条三坊十一坪／同十五坪／二条々間路／西三坊々間西小路・150㎡）

二条々間路北側溝（幅4.4m、深さ0.5m）を検出。また、この溝の南約23.5mのところで検出された東西溝は二条々間路南側溝の可能性がある。さらに、西三坊々間西小路東側溝と考えられる幅3.5m、深さ0.7mの南北溝を検出。(『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第131－2次（右京一条二坊二坪・207㎡）

弥生時代、古墳時代、奈良時代の遺構を検出。奈良時代の遺構としては、東西溝1条、掘立柱塀1条、土壙などを検出。(『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第131－27次（北京極大路と西一坊大路の交差点・27㎡）

第103－16次調査で検出した北京極大路南側溝の延長部南肩を検出。(『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第137次（右京二条二坊十六坪・750㎡）

十六坪西半中央部での調査。掘立柱建物28棟、塀5条、井戸2基、溝3条、道路1面、土壙などを検出。奈良時代の遺構は4期に区分できる。奈良時代初頭から中頃にあたる第1期と第2期には、十六坪を南北に二等分する位置に側溝心々間距離約3.6mの道路が通っていた。これは、この坪が平城京造営当初から奈良時代中頃にかけては、少なくとも二つの区画に分けて使われていたことを示す。この坪内の建物は、奈良時代をつうじて、3間2間程度の小規模なものが多い。さらに、第2期に属する縦板組の井戸からは鉛ガラス溶解用のるつぼや「田部□嶋」という人名を記した墨書土器が出土した。これらは、この場所の使われ方や居住者を知る手がかりとなる重要な資料である。(『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

鉛ガラス溶解用るつぼ

第142次（右京一条二坊六坪／同十一坪・900㎡）

西二坊々間路の東西両側溝を検出。東側溝は幅1.2m 深さ0.2m、西側溝は幅0.7m 深さ0.1m。道路幅は側溝心々間距離で8.6m。また、六坪内では5間2間の掘立柱南北棟建物1棟を、十一坪内では縦板組と見られる井戸1基を検出した。なお、一条々間路南側溝の存在が想定された調査区北部は、後世の削平が著しく、この溝は確認できなかった。(『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第141－14次（右京一条二坊三坪・113㎡）

調査区北部に一条々間路の存在が予想されたが、関連遺構は検出できなかった。(『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第151－22次（右京二条二坊十六坪・391㎡）

調査区は、十六坪の中央南寄り。掘立柱建物11棟、溝6条、土壙6基、道路などを検出した。奈良時代の遺構は4期に区分できる。奈良時代の初頭にあたる第1期には、十六坪を東西に2分する、幅約9.7m の南北道路が設けられていた。奈良時代前半にあたる第2期には、この道路は同規模で東へ約4.5m 移され、奈良時代後半の第3期まで存続する。奈良時代末にあたる第4期には、この南北道路は機能していなかったようである。この調査区の北西で実施した第137次調査の成果とあわせると、十六坪は奈良時代中頃すぎまでは、少なくとも東西及び南北にそれぞれ2分割されていたことになる。

十六坊は四分割利用

掘立柱建物は、全般に小規模で、第2期に属するものが比較的多い。また、遺物としては第2期の土壙から大量の土器が出土した。こうしたことから、この宅地は貴族の邸宅などではないこと、最も活発に利用された時期が奈良時代の前半であったことを読み取ることができる。(『昭和58年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第156－10次（右京二条三坊十二坪・1340㎡）

調査区は十二坪の南部中央。掘立柱建物15棟、掘立柱塀1条、井戸2基、土壙3基などを検出。奈良時代の遺構は5期に区分できる。第1期には、西廂付き南北棟建物をはじめ7棟の掘立柱建物が建つ。第2期には3棟の掘立柱建物が建ち、第3期には、東西に並び建つ同規模の東西棟建物2棟及び東西両廂付きとみられる南北棟建物の計3棟が建つ。第4期にも東西に並び建つ2棟の同規模東西棟建物など3棟が建ち、第5期には2棟の建物と1基の井戸が設けられる。

この場所の特徴として、各時期の建物配置に比較的計画性が感じられることがあげられる。(『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第164－30次（右京一条二坊八坪・90㎡）

奈良時代ないしそれ以降と考えられる、幅5.0m、深さ0.5m の南北溝を検出した。西二坊々間東小路の西、約10m に位置する。(『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第183－14次（右京一条二坊六坪／西二坊々間路・180㎡）

西二坊々間路幅員

西二坊々間路の東西両側溝を検出。東側溝は幅1.0m 深さ0.3m、西側溝は幅1.2m 深さ0.1m。道路幅は側溝心々間距離で8.5m。このほかに六坪の西端を画する掘立柱南北塀や六坪内の掘立柱建物などを検出。(『昭和62年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第183－18次（右京二条三坊一坪・425㎡）

一坪中央西辺部での調査。調査区北半部で奈良時代の塀１条・掘立柱建物１棟などを検出したが、南半部は流路跡の砂層であった。調査区西端部で予想された西三坊々間東小路東側溝は確認できなかった。(『昭和62年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

第191－6次（右京一条二坊三坪・150㎡）

奈良時代の遺構としては、総柱の掘立柱建物１棟、塀１条、東西溝１条を検出。調査区北部で予想された一条々間路南側溝は確認できなかった。(『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』)

奈良市第114次（右京一条二坊十一坪／一条々間路・80㎡）

南北二つの調査区を設定。十一坪の北端部にあたる南調査区は、全体が流路跡。北調査区では、柱穴、土壙、素掘り溝などを検出したが、いずれも奈良時代末以前にさかのぼるものではないことから、一条々間路の路面上にあたると考えられる。ただし、側溝が未検出のため道路幅などは不明。(『昭和61年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』)

奈良市第116次（右京二条二坊十六坪・294㎡）

十六坪南西部での調査。奈良時代に属する検出遺構は、掘立柱建物８棟、井戸１基、溝４条など。これらの遺構は、切り合い関係から４期に区分できる。掘立柱建物は、柱間寸法６～７尺程度が中心で全般に小規模。井戸は隅丸方形で、埋土からは奈良時代後半～末葉の土器とともに、軒丸瓦・軒平瓦が出土した。(『昭和61年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』)

奈良市第207次（右京一条二坊十四坪・450㎡）

十四坪北東隅道路側溝

十四坪北東部での調査。一条々間路南側溝（幅2.4m 深さ0.7m）と西二坊々間西小路（幅2.2m 深さ0.5～0.7m）を検出。いずれも溝内の埋土が２層に分かれており、一度掘り直されている。一条々間路南側溝の南には、平行して幅9.0m 深さ0.3m の奈良時代後半と見られる東西溝がある。このほか、四坪内で掘立柱建物２棟、塀１条、井戸３基などを検出。井戸のうちの１基からは奈良時代中頃の土器が、残りの２基からは奈良時代後半の土器が出土した。(『平成２年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』)

2　調査の概要

今回報告する地域は、1989年度から1991年度にかけて調査した西隆寺の地域で、調査総面積は6,067㎡である。各調査地区は、奈良国立文化財研究所が行っている平城京発掘調査の地区設定にしたがって、大地区を６ＢＳＲ、中地区を南からＮ・Ｏ・Ｐ・Ｑ・Ｒと定めた。各調査ごとの地区名は以下のとおりである。

各調査の地区名

209次(6BSR-O・P)、210次(6BSR-R、6AGA-Ｉ)、212次(6BSR-P・Q)、219次(6BSR-Q・R)、221次(6BSR-P・Q)、223-4次(6AGR-A)、227次(6BSR-R、6AGR-J)、228次(6BSR-Q・R)、223-21次(6BSR-Q)

なお、1971年から1973年にかけての西隆寺の発掘調査地区もFig. 3 の中に併せて図示した。この西隆寺第1～第6次の発掘調査総面積は5,434㎡である。

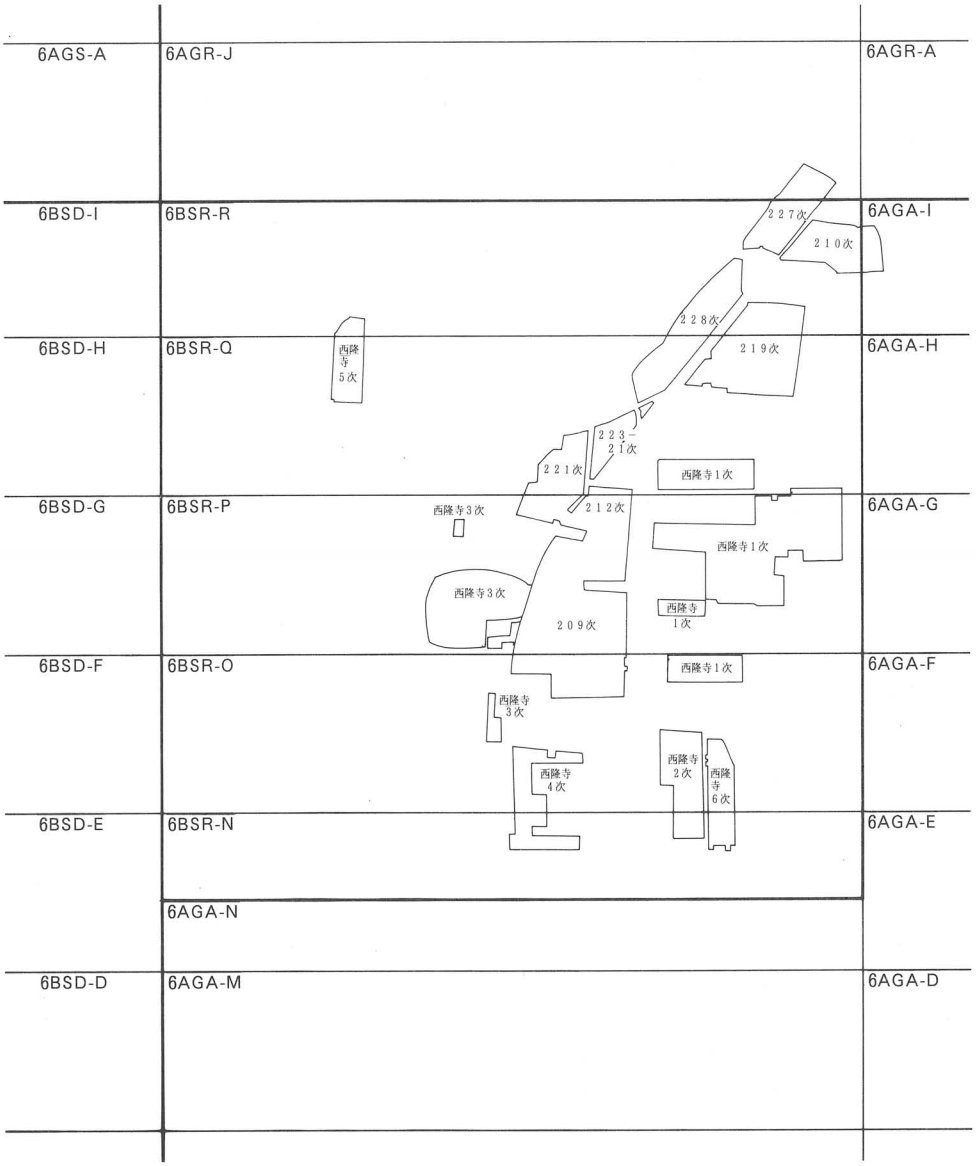

Fig. 3　６ＢＳＲ地区　地区割図

以下では、1989年度から1991年度にかけて調査した地域の、各次数ごとの調査概要を述べる。

第209次調査　金堂跡の東方で調査を行った。金堂の検出を目的とした1972年の第３次調査のトレンチを一部含んでいる。調査区中央で西隆寺東面回廊を南北19間分と、回廊の西雨落溝、回廊を東西へ横断し回廊内の水を排水する暗渠などを検出した。回廊は複廊で、東側柱より東は、後世の地下げにより、東雨落溝や基壇の東端など、回廊に伴う遺構は残っていない。調査区全面で、西隆寺造営以前の掘立柱建物や井戸・土壙を多数検出した。掘立柱建物はいずれも小規模で、金堂下層の調査結果と矛盾しない。また、調査区を東北から西南に流れる古墳時代の溝も検出した。調査区西端で、これに直交する溝もある。　**東面回廊**

第210次調査　寺域を画する築地の東北隅と、築地に伴う雨落溝を検出した。築地より東および北は、秋篠川の旧流路にあたり、遺構は残っていない。そのため築地本体の一部と、北面築地南雨落溝と東面築地西雨落溝を検出したにとどまる。北面築地南雨落溝は築地本体を暗渠でぬけ、東へ流れる。　**築　　地**

第212次調査　209次の北に接する地点の調査。回廊の東北隅を検出し、回廊建物に伴う土器埋納遺構を検出した。土器は東北隅中央の礎石据え付け掘形の底から出土した。回廊外側では、奈良時代前半の小形の井戸を検出した。下層では調査区南で古墳時代の小規模な掘立柱建物と塀を検出した。調査区北端で縄文晩期の土器を伴うＶ字溝を検出した。周辺に黒色粘質土層が広がり、水田の可能性を推定したが、確証はえられなかった。　**回廊東北隅**

第219次調査　伽藍の東北地区で、大きな建物群が重複していることが判明した。南北両面廂付掘立柱建物を中心とし、北に東西棟建物、東に南北棟建物を配する。中心の建物および東の建物は、当初は掘立柱建物だったものを、後に礎石建物に立て替えている。大型の井戸を伴い、造り替えを経ながら10世紀後半代まで存続した。井戸枠には扉板４枚が転用されていた。　**食　堂　院**

第221次調査　北面回廊に接する北の地区での調査。北面回廊の北側柱を５間分検出し、その北地区で掘立柱建物６棟と東西塀一条を検出した。掘立柱建物は重複しており、３時期に区分できる。桁行き10間以上の南北棟建物は尼坊の可能性を考えている。　**北面回廊と尼坊**

第227次調査　210次の西に接し、北の寺域を画する北面築地の南雨落溝や西隆寺造営以前の掘立柱東西塀を検出した。　**北面築地**

第228次調査　伽藍の東北地区で、大きな建物群を検出した219次の西に接した場所での調査。北区と南区に分かれる。228次の北区では、219次で検出した中心建物とその北の東西棟建物の北に、さらに１棟の東西棟建物が配置されていることが判明した。　**食　堂　院**

228次の南区では、西隆寺造営以前の大形の東廂付南北棟建物を検出した。西隆寺寺域内で検出した宅地建物の中では、最も大形のものである。発掘区西端では、古墳時代から西隆寺創建期まで続く池状遺構を検出した。

第223－21次調査　228次の池状遺構の西南部に接する地域での調査。池状遺構の西南部の肩を検出すると共に、南北方向一対の掘立柱で構成された門を検出し、西隆寺東北部分の「院」の西側を画する築地塀のような施設を考えた。また、池状遺構を埋めて整地する段階で作った暗渠や東西塀を検出した。　**食堂院西側の区画**

3 調 査 日 誌

A 第209次調査

6BSR-O・P地区

1989年9月28日～11月29日

9・27 発掘区の設定。

9・28 バックホーによる耕土排土開始。

9・29～10・1 バックホーによる耕土排土。

10・2 発掘区西面の排水溝掘り下げ。床土の下に暗灰褐砂質土の面と、その下約20cmに茶褐色粘土（地山）がある。まず、暗灰褐砂質土の面で遺構検出を行う。

10・3 排水作業及び排水溝掘り下げ。北方の旧発掘区の埋め戻し土を取り上げる。旧遺構面は現検出面より20～30cm下。

10・4 旧発掘区の遺構面までの掘り下げ。地区杭打ち。発掘区東部をバックホーによる耕土排土。

10・5 バックホーによる耕土排土終了。暗灰褐砂質土の面で遺構検出。

10・6～11 遺構検出。現検出面で柱穴はなく、細溝のみ検出。

10・12 47ラインのすぐ西側で、幅30～40cmの範囲に瓦が南北に堆積。断面をみると浅い溝に瓦が詰まっており、回廊西側溝に瓦が投棄され、その底が残っているものと考えられる。また、PKラインの北45ラインで2つの凝灰岩が並んでおり、回廊を横断する暗渠（SX400）と考えられる。

10・13 46ラインのすぐ東で根石を検出。これをたよりに、礎石抜き取り穴を探すと、46ラインのすぐ東で、抜き取り穴が南北方向に並ぶ。47ラインの東を再び精査すると、やはり抜き取り穴が検出された。45ラインより東は一段下がって削平されているが、一部に礎石抜き取り穴の痕跡がある。

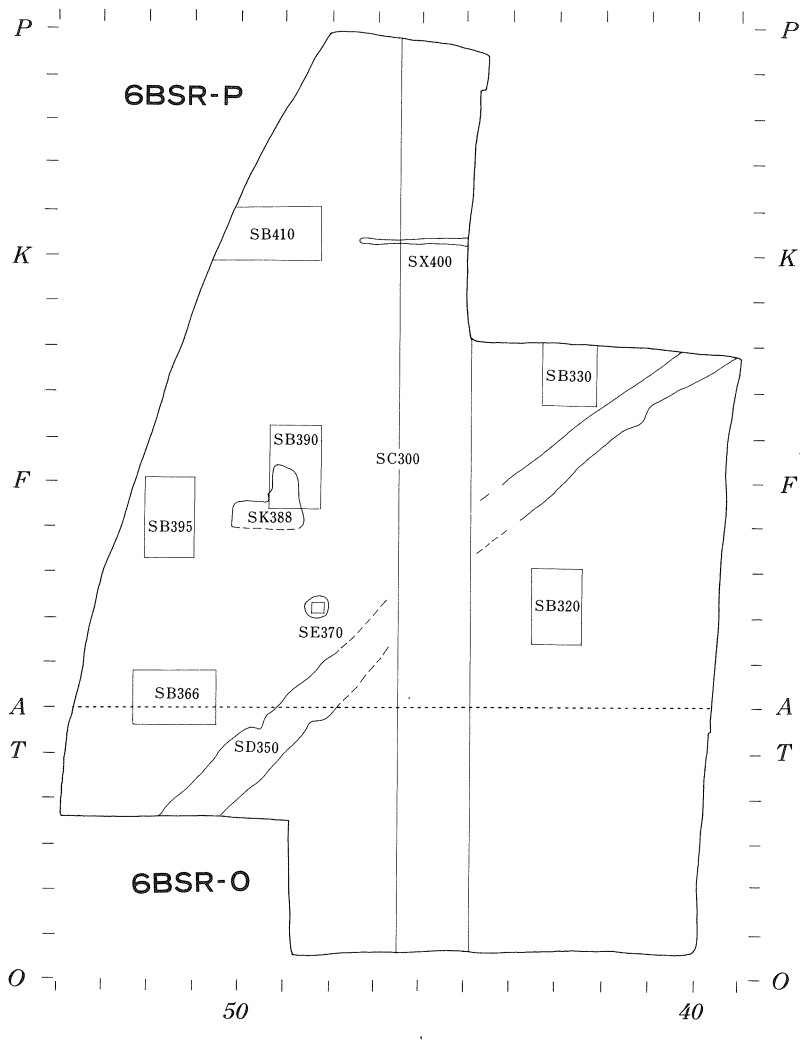

Fig. 4 第209次調査地域の地区割と主要遺構

回廊SC300は複廊と考えられる。

10・16　SC300の検出。

10・17　SC300の検出。PK47では、暗渠延長の底石を検出。底石は玉石が3列に並び、西端が凝灰岩で見切られ、西に延びない。

10・18　瓦のつまった溝は暗渠の手前迄で、その北はみつからない。なかったのか、それとも北側が一段高かったのか。OS以南では、黒灰褐色で炭化物を含む土が広がる。奈良時代前半の土器を多く含む。

10・19　発掘区東側は44～45ラインの中間で奈良時代後半の整地層と考えている層が、後世の削平のため急に段差をもってなくなる。これより東は奈良時代前半の整地層まで下げる。PE49では遺物を多量に含む土壙SK388を検出。写真撮影。

10・20　暗渠SX400の掘り下げ。底石の配列により、回廊の基壇西端が確定した。PG49の土壙完掘。PE49の瓦溜の掘り下げ。

10・21　PE49大土壙（瓦溜）を完掘。

10・23　発掘区東側の遺構検出。細溝が多く、柱穴をみつけてもつながらない。

10・24　発掘区東側、PA～PG ライン間に多量の瓦。この瓦を含む層から二彩・金属・炭出土。寺院廃絶時に廃棄されたものか。遺物は黄灰土で取りあげ。

10・25～26　瓦を多量に含む黄灰土の取りあげ。

10・27　黄灰土の取りあげ。清掃作業。

10・30　写真撮影。

10・31　ヘリコプターによる写真測量。写真撮影。

11・1　今日から西半部で西隆寺建立以前の遺構を捜すために、西隆寺造営時の整地土をはずす。

11・2　西側の下層遺構検出。いくつかのピット・柱穴を検出。発掘区南辺で、斜行する黒褐色の土層がある。古墳時代の溝か。

11・4　下層遺構の検出。

11・6　下層遺構の検出。

11・7　柱穴を捜しながら51ラインまで戻る。PI49大土壙の掘り下げ。

11・8　発掘区西端に至る。建物はほぼ確定したが、いずれも小規模である。桁行柱間3間とするものがほとんどである。

11・9　斜行大溝SD350の掘り下げ。溝から布留式土器が出土し、古墳時代の溝と確定した。

11・10　清掃及び写真撮影。

11・15　パスコによるつるべ式測量。

11・16　遺構精査。礎石抜き取り穴は、予想通りいずれも浅い。

11・17　遺構精査。SE370の井戸完掘。写真撮影。

11・18　現地説明会。

11・20　回廊西雨落溝底の瓦堆積をはずす。

11・21　砂入れを行い、発掘調査終了。

B　第210次調査

6BSR-R 地区、6AGA-I 地区

1989年11月20日～12月12日

11・20～25　ユンボによる表土排除。

11・29　発掘区東から遺構検出開始。地区杭打ち。秋篠川の氾濫堆積である暗灰粘土を掘り下げる。暗灰粘土の中には奈良時代の瓦のほかに、16～18世紀の土器を含む。

11・30　暗灰粘土の掘り下げ。

12・1　発掘区中央の暗灰粘土の掘り下げ。土馬片出土。

12・2　暗灰粘土の掘り下げ。14ライン付近は、築地に近いためか瓦は次第に多くなる。南半部では砂層の上に青灰シルトが残る。青灰シルトは築地土壇の下にもぐる。したがって砂層は奈良時代以前の秋篠川の堆積とみることができる。

12・4　土壇裾までの暗灰粘土の掘り下げを完了した。

12・5　土壇上の遺構検出。SB425・SB426を検出。SB425は梁行2間、桁行2間以上の東西棟の

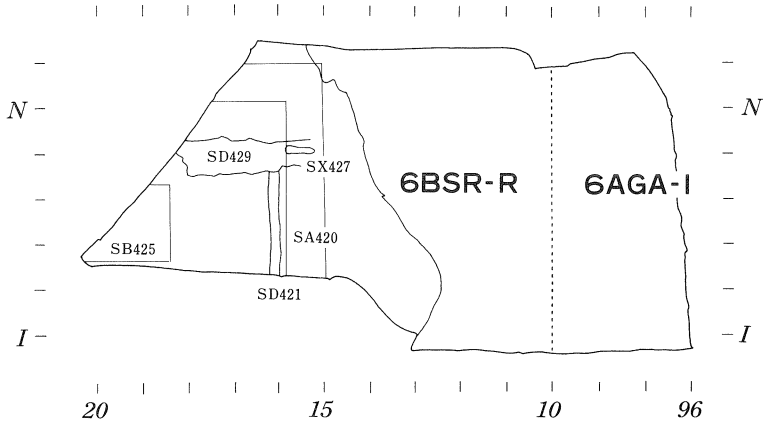

Fig. 5　第210次調査地域の地区割と主要遺構

可能性がある。SB426はSB425に切られる建物で、東西方向に一間分を検出。SB425の柱掘形（RJ18）から9世紀の土師器片出土。また16ラインにおいて、凝灰岩切石を検出。

12・6　西側土壇上の精査。土壇の地山面の上に、茶褐砂質土の整地土があり、築地積土と思われる（築地基壇土SA420の検出）。築地東端を覆う黒灰土・灰褐土を取り去ると、若干抉れた灣曲をなし、これが築地の東雨落溝の可能性もある。RL・RMライン上の土壙を掘り下げ、その下から東西溝SD429を検出した。SD429は昨日検出した凝灰岩切石につながり、築地部分は暗渠SX427になることが判明した。なお、土壙からは奈良末頃の土器が出土している。

12・7　SD429の掘り下げ。暗渠SX427は壊れた凝灰岩側石の上に自然石を積み、蓋には凝灰岩の切石と自然石を使う。午後写真撮影。

12・8　清掃。RM16・17で柱穴を検出し、先に検出していた柱穴と組み合う（SB428）。ヘリコプターによる写真測量。

12・11　SB428の写真撮影。柱穴及び土層の精査。築地想定位置にのる黄褐粘土は積土ではなく、その下に西雨落溝SD421を検出。SD421の写真撮影。

12・12　測量。図面完成。砂入れをして調査を終了した。

C　第212次調査

6BSR-P・Q地区

1990年5月7日～6月19日

5・7～10　ユンボによる表土排除。

5・11　壁面清掃及び溝掘り。

5・14　発掘区南から遺構検出。床土中層までの掘り下げ。西では暗渠の玉石SX446を一部検出する。

5・15　南東部と西張出部で遺構検出。西張出部は、耕土直下より順に床土をはがす。旧床土下で礎石据えつけ掘形を検出（北面回廊SC450）。基壇内と思われる位置に土師器甕を正位の状態で検出した。東南部では小穴群を検出（後にSB441としてまとまる）。

5・16　南半部は灰色砂を取りあげ、黄灰褐粘土上面で小穴群SB441を検出。柱穴出土の少量の遺物から判断して、古墳時代のものであろう。西張出部では礎石据えつけ掘形底部の検出。

5・17　PP40ラインで井戸SE448を検出。発掘区北半部では、百貨店建設工事に伴う攪乱が著しく、攪乱坑を掘り下げる。SC450上の土師器甕は、写真・実測後取り上げ。

5・18　発掘区北半部の遺構検出。回廊より東の部分を暗灰土として砂層まで掘り下げて奈良時代の遺構面を検出。SE448の写真撮影。昨日取り上げた土師器甕内の底部に銭貨が付着とのこと。

5・19　排水作業。

5・21　PPラインの落ちは東西方向の溝となる。ただし北肩のみ検出。溝は浅く遺物もなく、坪境小路の南側溝SD451の可能性を考える。南西部では東面回廊SC300の東雨落溝SD445を検出した。溝は中央が深くなる。

5・22　東西溝SD452を検出。遺物はない。坪境小路の北側溝であろう。発掘区全体の清掃。

5・23　清掃後に写真撮影。SE448の掘り下げ。横板組の外枠の中に、平瓦を円形に並べ中に刳もの桶を置く内枠がある。外枠と内枠の間の埋土より和同銭2枚出土。

5・24　清掃後にクレーンによる写真撮影及び写真測量。ハイライダーによる写真撮影。回廊部分の拡張区を設定し、表土排土。

5・25　拡張区では礎石据えつけ掘形を検出できず、これにより先に検出した土師器甕を回廊東北隅中央位置にした複廊東北隅が確定した。

5・28　北半部は下層の検出。SE448の掘形を掘り下げ、軒平瓦が出土した。

5・29　北半部で遺構検出。小形の柱穴群出土。はじめ掘立柱建物かと考えたが、方位を異にしており、掘立柱塀二条SA453・454であろう。SD452より新しい。発掘区南半の壁の掘り下げで、3条の流路を断面で確認。

5・30　北半部では砂層の掘り下げ。南半部では一部を黒色粘土層まで下げて遺構検出。

5・31　記者発表。黒色粘土層の掘り下げ。

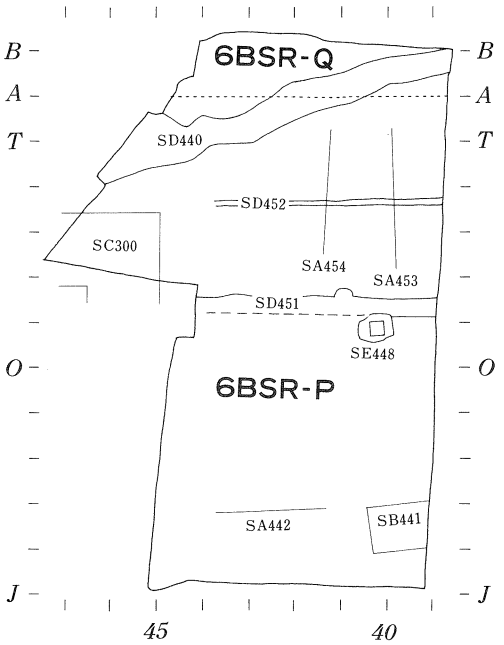

Fig. 6　第212次調査地域の地区割と主要遺構

6・1　調査区北端では溝SD440を検出。
6・2　排水作業。
6・4　SD440の掘り下げ。SD440から縄文時代晩期の土器が出土した。
6・5　北東部分では下層遺構の検出を続ける。縄文晩期から弥生にかけての水田面を想定して精査したが、畦畔の確認ができず、確証が得られない。SD440は、斜行溝となる。
6・6　遺構精査及び実測。
6・7　北面回廊SC450の精査。北側柱東から2番目の据えつけ掘形から漆付着土器出土。クレーンによる写真撮影。
6・8　SD440の掘り下げ。埋土の底近くから縄文時代晩期の船橋式土器が出土した。写真撮影。
6・11～12　SD440の掘り下げ。
6・13　水田面を想定して遺構検出するが、明瞭な畦畔は検出できない。
6・14　SD440の掘り下げ。土層の実測及び写真撮影。
6・15　排水作業。平面実測。
6・16　平面実測。
6・19　実測及び写真撮影。埋め戻し砂入れを行い調査を終了した。

D　第219次調査

6BSR-Q・R地区
1990年11月7日～11月22日
1991年1月22日～3月29日

11・7　現場縄張り。バックホーによる排土開始。
11・8　バックホーによる排土。東側をやや深く、西側を浅く掘り下げる。
11・9　バックホーによる排土終了。
11・13　発掘調査開始。発掘区南端に排水溝を掘り下げると、壁際で礎石据え付け堀形と根石を3間分検出した。
11・16　遺構検出。遺物包含層（灰褐砂質土）を掘り下げる。
11・17　東西棟建物SB495を検出。また発掘区南半部では、SB490の北入側柱列の一部を検出した。
11・19　東半部の遺構検出。東半部は削平され、古墳時代の斜行溝も残っていない。SB490の北入側柱列を新たに検出。根石の残るものがある。
11・20　SB495の抜き取り穴とRD27区の柱穴掘形（建物としてはまとまらない）に、壁土かと思える黄色と輝緑色の粘土が入り、特徴的。RD27区の穴は、SB500の柱穴により切られており、直接の切り合いではないが、SB500がSB495より新しいと一応判断した。
11・21　柱穴の掘り下げ。
11・22　柱穴の掘り下げ。東半の一段低い柱穴には砂を入れた土のうをつめ全面にシートをかける。市道と東の家の撤去の目途がたつまで、発掘調査を一時中断することになる。
1・22　219次－西区に接して、ほぼ敷地いっぱいに発掘区を設定する。バックホーによる排土開始。
1・23～24　バックホーによる排土。
1・30　発掘調査開始。発掘区北端にコンベアを並べる。排水溝を掘り、南へ2スパン耕土下の灰色砂を削りながら進む。暗褐色粘土の上に橙灰色砂が一層あり、この上面で掘立柱掘形を検出。
1・31　発掘区東端で排水溝を掘り、西側へむかって発掘を行う。建物になる柱穴は、いまのところ

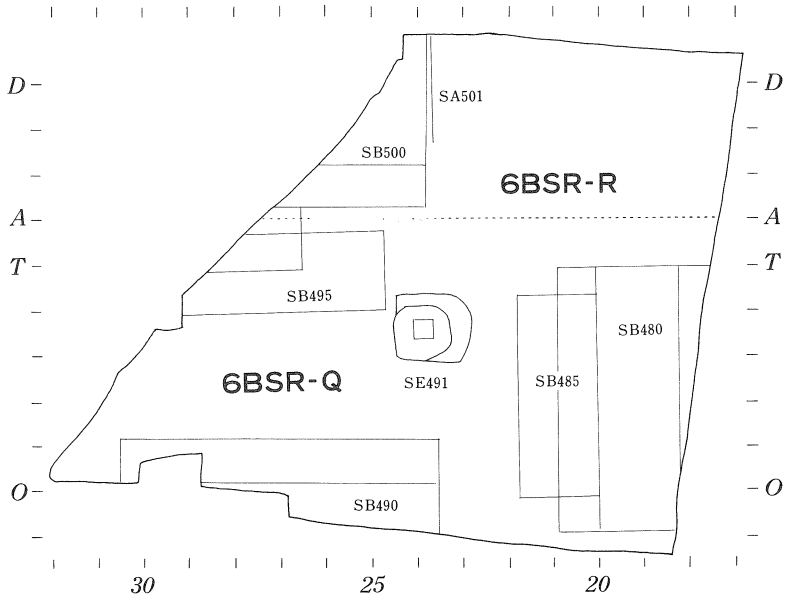

Fig. 7　第219次調査地域の地区割と主要遺構

まだない。

2・1　20ラインで柱穴群を検出。(後に、SC480とSB485の東側柱となる)

2・4　22ラインまで検出。橙灰色砂上では、小穴の他はあまりはっきりした遺構はない。

2・5　24ラインまで検出。SB500とそれに重複するSA501を検出した。

2・6　東へ折り返して、遺構の再検出を行う。井戸SE491の掘り方を検出。

2・7　折り返して遺構検出を続行。西から東へ進み、19〜20ラインまで至る。基本的には橙灰色砂を掘り下げ、暗褐土の上で検出しているが、東北部分では橙灰色砂が分厚く遺構の判別が難しい。20ライン・21ラインで長大な南北棟建物SC480を検出。南北棟の廂部分かと思ったが、これだけ長いと、尼房や回廊の可能性も考慮する必要がある。

2・8　21ラインから東へむかって遺構検出を行う。近代の建物の基礎による撹乱により、遺構検出は手間どる。

2・11　柱穴の配置が複雑で、遺構の規模確定に苦しむ。

2・12　前日と同一箇所の遺構を丹念に精査。

2・13　検出を続行する。ほぼ21ラインまで至る。中央回廊上の遺構SC480は、あまり南北に延びず、しかも他の建物と切り合っているようである。

2・14　21ライン西の瓦を含む南北溝を掘り下げ、その西側を遺構検出。

2・15　西から東に折り返し遺構検出。QR・QS23で大土壙検出。大土壙には井戸が切り合い、井戸SE491の方が新。井戸埋土には大量の瓦と土器片が混じり、土器は9世紀後半から10世紀代のものか。発掘区南半ではSB490の東側柱を検出。

2・18　東から西へむけて遺構検出し、本日は21ラインまで。20・21ラインの柱列は柱間が揃わず、回廊にはなりえないのではないか。SE491の掘り下げを開始。

2・19　SE491の掘り下げ。井戸は、掘形と抜き取り穴が重複し、二時期の可能性が強い。SE491−Bの掘形からは10世紀代の黒色土器が入る。

2・20　発掘区西側の遺構検出。SE491の掘り下げ。

2・21　SB485を検出した。SC480と切り合いSB485が古い。SE491の断面図実測。

2・22　遺構精査。RA22・23区で古墳時代の土器を含む層がある。SD493の延長溝であろう。

2・25　SC480は南から9間分続くことが確定。QT21では、礎石据え付け掘形とおぼしき部分を検出した。

2・26　SE491の掘り下げおよびセクションベルトをはずして遺構検出。

2・27　SE491の掘り下げ及び井戸南方の畔下の検出。2.7mをへだてて2個の円形穴を検出。

2・28　清掃作業。記者発表。雨おさまらず。

3・1　現地説明会へむけての清掃作業と準備。

3・2　現地説明会。

3・4　SA484では掘形に柱根が残り、それに重複する土壙からは西隆寺式軒平瓦2枚が出土。

3・5　QO27・28のコンクリート擁壁ぎりぎりまでの拡張を開始し、SB490の北入側柱列の輪郭全体が明らかになる。

3・6　清掃作業とクレーンによる写真測量。

3・7　発掘区西南部を敷地ぎりぎりのところまで拡張する。SB490の西側柱列の確定をはかるためである。

3・8　南北棟建物SB515を検出した。

3・11　西側拡張区において、SB490の西側柱列を検出し、東西7間になることが判明した。

3・12　SB490の東西に2等分する中軸線に対してSE491と東西対称と思われる位置に、井戸とおぼしき深い掘形のSE492を検出した。

3・13　発掘区西端・南端部の精査。写真撮影。

3・14　SE491の平面実測を行い、井戸内埋土の西半分を掘り下げ始める。

3・15　井戸内埋土は下層が黒灰色粘土で、黒色土器・瓦片・延喜通宝等が出土し、最下層の暗灰砂層から須恵器小壷等が出土した。午後からは井戸の掘形の西半分を掘り下げ始める。

3・16　井戸の掘形の掘り下げ。

3・18　井戸枠の取りあげ。井戸枠を観察すると、下端に造り出しの軸を残し、四面とも扉板の転用であることが判明した。

3・19　遺構精査。南北棟建物SB485とSB480は重複している部分が多く、大部分の柱穴掘形の半分を掘り下げる。

3・20　遺構精査および実測。

3・21　遺構精査および実測。

3・22　SB490の遺構精査では、当初掘立柱の建物であったものを、同位置に同規模で礎石建ちに改めていることが判明した。

3・25　遺構精査。

3・26　西側拡張区の実測を行う。

3・27　遺構精査および発掘区北壁の実測。

3・28　遺構精査および発掘区北西壁の実測。

3・29　発掘調査を終了した。

E　第221次調査

6BSR-P・Q地区

1991年1月22日〜3月14日

1・22　バックホーによる表土排土開始。盛土・耕土・床土（黄褐粘土）の排土を行う。現場小屋建設。

1・23〜25　バックホーによる表土排土。

1・29　地区杭打ち。

1・30　遺構検出開始。

1・31　灰色砂及び黄褐土をはずし暗灰褐砂質土（包含層）上面で遺構検出を行うが、遺構は検出できない。調査区西部では暗灰褐砂質土が薄く、すぐ下層の橙褐砂質土があらわれる。

2・1　黄褐土をはずして暗灰褐砂質土上面で遺構検出を行うが、近・現代の住居布基礎・便所・使途不明の板囲いを検出したのみ。

2・2　ベルコンをトレンチ北部東壁沿いに南北に並びかえて作業開始。45ライン付近までは撹乱がはげしい。

2・4　暗灰褐砂質土上面を検出。発掘区中央で東西棟建物SB541東端を検出。

2・5　QB以北で47ライン付近から西へ進んで遺構検出。QBラインからQFライン付近に広がる淡黄褐粘土で柱穴を検出。

2・6　柱穴群の検出。SB541の東半部、SB542の西側柱、SB543等を検出。QG46地区から45地区にかけて瓦が帯状に散布する。

2・7　SB542の東側柱の一部を検出。帯状に散布した瓦をとりあげる。その下に暗灰砂層があり、さらにその下の淡黄褐粘土上面が遺構検出面である。

2・8　SB541西半部の検出。発掘区北端でも柱穴が見え始める。

2・12　排水作業。QF～QEの暗灰砂層を取り除き、淡黄褐粘土面で遺構検出。柱穴・小穴を多数検出。

2・13　SB542の東側柱、SB544、SA547を検出。

2・14　調査区南端から暗灰砂をはずし、橙褐砂質土上面で遺構検出。PTライン付近で、東西に列ぶ瓦溜りの列SX550を検出した。

2・15　南からQC・QBラインまでの遺構検出。遺構は少ない。

2・16　暗灰砂をはずしながら北上し、QCラインから南へ折り返す。調査区西部で柱穴を検出。

2・19　北面回廊SC450の北側柱列を検出。

2・20　SC450の掘り下げ。

2・21　バックホーによる排土運搬。

2・25　清掃作業。

2・26　クレーンによる写真撮影及び写真測量。ラジコンヘリによる写真撮影。地上写真撮影。

2・27　遺構精査。

3・1　排水作業。遺構の清掃。

3・2　排水作業。清掃。現地説明会。

3・4　SC450の遺構精査。講堂東端想定位置では、基壇と認めらるれような積土層は認められない。

3・5　遺構精査。調査区西南部付近（講堂の可能性のある付近）で一段下げるが、顕著な遺構はなかった。

3・6　下層遺構（縄文時代の溝SD440）の検出を目的として発掘区内の一部掘り下げ。

3・7　SE548の検出、掘り下げ。遺物は平城宮土器Ⅶの時期のもの。講堂の存在及びその存続時期について検討が必要である。下層遺構の検出では、SD440の北肩を検出した。下層掘り下げ部を残して砂入れ終了。

3・8　下層遺構検出。

3・12　排水作業。下層遺構の実測。

3・13　バックホーによる埋め戻し。

3・14　埋め戻しを完了した。

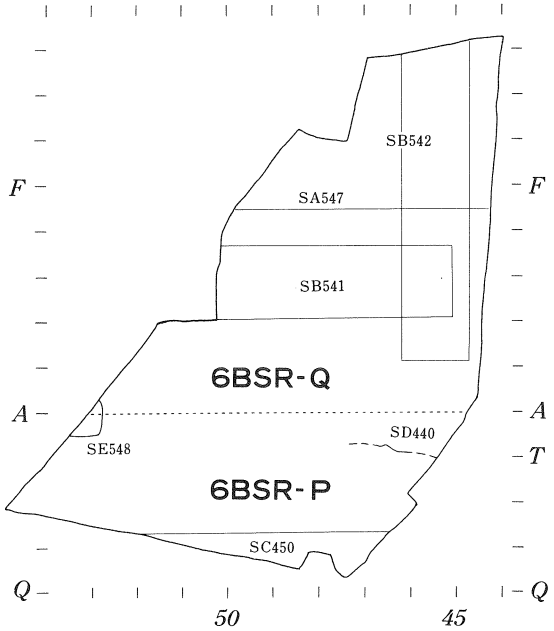

Fig. 8　第221次調査地域の地区割と主要遺構

F　第223－4次調査

6AGR-A 地区

1991年6月13～14日

6・13　バックホーによる掘削。

6・14　耕土より下は、秋篠川の堆積層が続き、奈良時代の遺構面は現存せず。地表面より約4mまで掘り下げるが、川の堆積層が続く。これより下の掘削は危険な為、掘削を終了する。平面・土層図を作成し調査終了。

G　第227次調査

6BSR-R、6AGR-J 地区

1991年7月2日～7月31日

7・2　発掘区の設定。アスファルトの撤去。

7・3～6　ユンボによる表土排土。

7・8　発掘調査開始。地区杭打ち。

7・9　床土掘り下げ。

7・10　床土掘り下げ及び遺構検出。SD429の北肩を検出。

7・11　Nライン付近の遺構検出。

7・12　南からJAラインまでの黒灰粘質土の掘り下げ。

7・15～17　黒灰粘質土の掘り下げ。

7・19　青灰粘土の掘り下げ。

7・20　青灰粘土の掘り下げ終了。旧秋篠川SD431の南肩を検出。

7・22　礎石据えつけ穴1個SX608、及び築地南雨落溝SD429の再検出。

7・23　SB425の北西隅柱穴の検出。SD429の掘り下げ。

7・24　SD429の掘り下げ。

7・25　清掃。クレーンによる写真測量。地上の写真撮影。SD429の掘り下げ。

7・29　SD429の掘り下げ。

7・30　SD429の掘り下げ終了。清掃後、写真撮影。

7・31　実測。砂入れして調査終了。

H　第228次調査

6BSR-Q・R地区

1991年8月5日～10月3日

10月3日～11月7日

8・5～8・6　バックホーによる表土排土。

8・7　バックホーによる表土排土終了。地区杭打ち。

8・8　発掘調査開始。

8・9　灰褐土の除去。西端部は1段低くなっているらしい。

8・12　灰褐土の除去及び耕土溝の掘り下げを行い、遺構検出を行う。

8・13　灰褐土の除去の続きを行う。

8・16　36ライン東の南北溝以西は包含層がかなり厚い。北西壁から折り返して、遺構検出。包含層には多量の遺物を含む。包含層の一部掘り下げ。

8・17　QR35地区で古墳時代の土器が出土。

8・20　北西壁から折り返しての遺構検出の続きで、柱穴群を検出したが、遺構としてはまとまっていない。

8・21　QN36の土壙の掘り下げ。

8・22　柱穴群出土。後にSB520としてまとまる。36ライン以西の一段低い部分は、土壙状のくぼみが重なり合う。

8・23　SB510の東側柱及び東廂部分を4間分検出した。当初長廊状遺構と理解したが、後に南北棟の東廂部分であることが判明。

8・26～27　34・35ラインでの遺構検出。SB520の西側柱等を検出。

8・28　遺構検出。本日までに確定したのは、SB510の東廂部分、SB520、219次調査検出のSB515の北西隅柱穴、SA512・SB511等である。

8・29　クレーンによる写真測量。地上から写真撮影。

8・30　発掘区西端のSD529の掘り下げ。

8・31　QPラインで土層の掘り下げを行い、黄褐砂質土面上で柱穴を検出できることが判明。

9・2　遺構精査。SA525の検出。QPライン上で礎石据え付け掘形をもつ柱穴群SB521を確認した。

9・3　遺構精査。SB520の掘り下げ。

9・4　SE492該当部分についての拡張を行う。1×2.8m。QPライン以南での遺構精査。

9・5　SE492検出。QPライン以南での遺構精査。

9・6　遺構精査。SE492掘り下げ。

9・7　井戸SE492には抜き取り穴があり、平瓦・丸瓦が多く投げ込まれている。

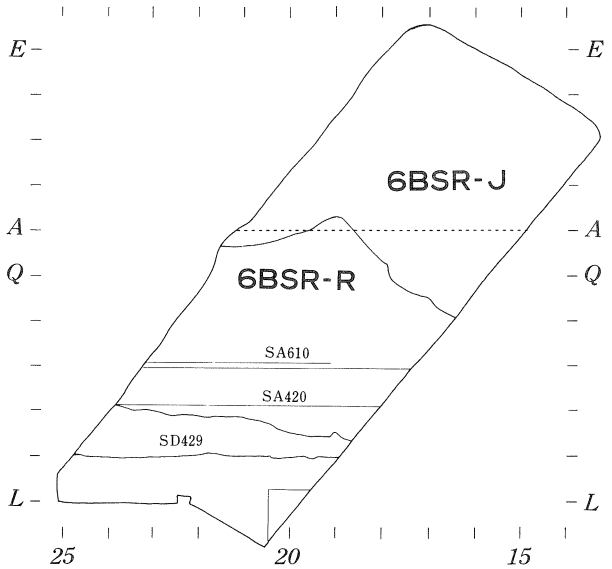

Fig. 9　第227次調査地域の地区割と主要遺構

9・9　SE492の掘り下げ。発掘区西端でのSD529の掘り下げ。

9・10～11　SE492の掘り下げ。当初長廊状遺構と考えていた建物は、南北棟SB510の東廂部分であることが判明。SD529の掘り下げ。

9・12　SE492は、現地表面から3.3mのところまで掘り進んだが、底には至っていない。SD529の掘り下げ。

9・13　排水作業及び遺構精査。

9・17　排水作業。SE492の清掃及び写真撮影。SD529の掘り下げ。

9・18　SD529・SG530の掘り下げ。SE492を発掘調査区側から掘り進む。

9・19　SE492は、崩壊の危険があり、これ以上の発掘を中止し、埋め戻しをはじめる。平面実測。

9・20　SE492の埋め戻し終了。SG530の掘り下げ。

9・21　SG530の青灰色粘質土の掘り下げを続行。

9・24　SG530の掘り下げ。古墳時代の土器出土。

9・25　池状遺構SG530の落ち込んでいる部分は、古墳時代の流路らしく、立木の根が岸に残る。勾玉や馬歯などが出土。

9・26　清掃。SB510及びSG530の写真撮影。

9・27　花粉分析資料の提供。記者発表。

9・30　クレーンによる写真撮影（8月29日）後に検出した遺構についての平面実測。東の方から砂入れを始める。

10・2　遺構精査。砂入れ。

10・3　実測及び写真撮影。砂入れをして調査を終了。

10・3　228次北調査区の発掘区を設定。バックホーによる耕土排土。

10・4　バックホーによる耕土排土終了。

10・18　遺構検出開始。ちょうど東壁沿いに水道管の掘形があり、これを掘って排水溝とする。柱穴を検出しはじめる。

10・19　地区杭打ち。南東から掘り進む。多数の柱穴が出土するも、本日中にはまとまらない。RD29より鬼瓦出土。

10・21　遺構検出を続け、ほぼ北西壁近くまで達する。SA507を検出。西側は黄褐粘土がかぶり、遺構面が不明瞭となってきた。

10・22　折り返して遺構検出。穴・溝を掘り下げる。26ライン以東、29ライン以西では砂地の地山で、その上で遺構検出。SB508には柱根が残存する。

10・23　SA507及びSA506を検出。SA507は北方の建物SB508と一体で、SA506は「院」の北を限る塀となる可能性が大きい。218次検出のSB500は西壁ぎわに北側・北入側妻の柱掘形を検出し、その平面は七間二面、柱間9尺等間の大規

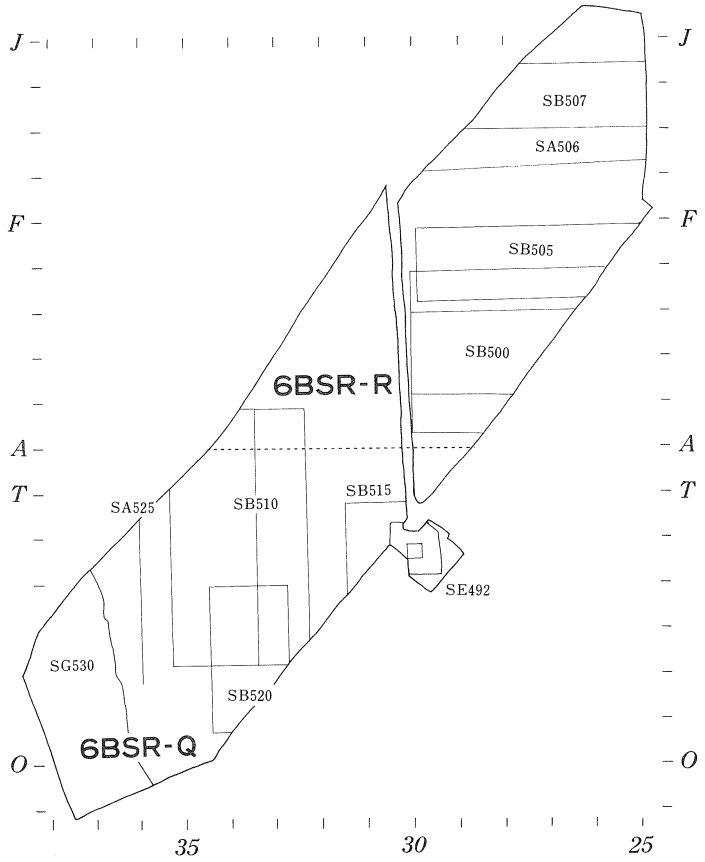

Fig. 10　第228次調査地域の地区割と主要遺構

模なものと判明した。

10・24　南西部分を残して、遺構検出も収束に近づく。ただし、この部分は切り合いがやや複雑である。

10・28　SB505の北側柱を検出。SB500・SB505の性格付けを含めて、これらの建物が西隆寺造営以前か、以降か、時代の限定が重要となってきた。排水作業後清掃し、写真撮影。

10・29　壁面実測。クレーン撮影のためのターゲット打ち、及びクレーン下に敷く鉄板の搬入完了。

10・31　清掃後クレーンによる写真撮影。SB504の検出、SB505の南側柱の検出。

11・ 1　遺構精査。東南壁の柱穴部分の掘り下げ。

11・ 2　遺構精査。計15箇の柱穴を精査。

11・ 5　遺構精査。一部砂入れを始める。

11・ 6　遺構精査及び実測。

11・ 7　砂入れし、現場小屋を撤収する。発掘調査終了。

I　第223－21次調査

6BSR－Q 地区

1992年1月6日～2月6日

1・ 6　発掘区設定。バックホーによる排土開始。

1・ 7　バックホーによる排土終了。壁面清掃及び溝掘り。

1・ 8　地区杭設定。南東部より遺構検出。

1・10　灰褐粘質土の掘り下げ。発掘区西南では柱穴・溝が検出できるが、発掘区東北では遺物包含層が深い。

1・13　掘立柱一対の柱 SB540を検出。

1・14　灰褐粘質土の掘り下げ。SB540に柱根をともなうことが判明。

1・16　発掘区東南部の遺構検出。

1・17　発掘区東北部の遺構検出。

1・18　東西方向の塀 SA535を検出。発掘区東の三角地部分の掘り下げ。

1・20　蛇行溝 SD06の検出。SD06及び SA535の写真撮影。

1・21　SA535は西から3番目の柱掘形に柱根が残り、その脇に木製暗渠 SX533があることが判明。発掘区東の三角地部分の掘り下げ。

1・22　発掘区東北部では暗赤褐砂質土を掘り下げ、発掘区東の三角地部分では青灰砂質土から青灰粘土を底まで下げる。

1・23　遺構検出及び清掃後、写真撮影。

1・27　写真撮影及びクレーンによる写真測量。

1・28　遺構精査開始。SB540の柱根の底に石と瓦を敷いて礎板としている。南側の柱掘形の底部から、西隆寺創建軒丸瓦6235C が出土した。SB540は主要伽藍の整備後の建立を示す。また SA535の柱掘形から6663Cb 及び6710A が出土した。

1・29　遺構精査と SG530の掘り下げ。池の上層埋土から6225E が出土。SG530の埋土内から、橋脚に用いたと思われる平行2列の杭列 SX531を検出。

1・30　排水作業及び遺構精査。SX531の杭は地山まで到達していないものが多い。

1・31　SG530の掘り下げ。発掘区東の三角地部分のトレンチでは多数の木片及び木材が出土。杭も4本地山につきさる。写真撮影。

2・ 1　排水作業。壁面清掃。

2・ 4　昨日からの大雨で壁面崩壊。壁面の整備作業及び壁面実測。

2・ 5　壁面の整備作業及び壁面実測。

2・ 6　平面実測。砂入れして発掘調査を終了。

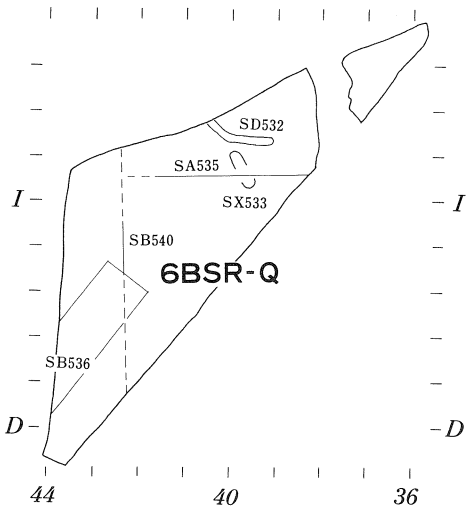

Fig. 11　第223－21次調査地域の地区割と主要遺構